

---

# 異界から召還された真水の騎士

漆黒の光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異界から召還された真水の騎士

### 【Nコード】

N9124F

### 【作者名】

漆黒の光

### 【あらすじ】

大学受験に失敗し、翌日にずっと慕ってきた女子に振られ、更にその翌日には気晴らしに行った山の崖から転落した斎賀。このまま死ぬかと思ったが落下中に見知らぬ場所に飛ばされ、唯一の武器はいつの間にかもっていたチェーンソー。斎賀はこの見知らぬ土地で生き残ることは出来るのか……。王道的なファンタジー世界に召還された一人の少年が、新たな風を巻き起こす！

## 第零話 襲撃される者

ジャスカイド帝国南部上空。

広大な土地を有するこの大陸で、命を賭けた追いかけてここが開催されていた。

「待てええええ！」

「おい、逃がすなよ！」

「追え！ 追ええ！」

どこまでも純白で彩られた無数の羽が集いし翼が、風を切りながら自らの主を前へ前へと押し出し加速する。

傍から見れば気持ちよさそうに滑空しているが、実際その顔に映える表情は少しながら重く、とてもじゃないが機嫌が良いようには窺えない。

その身に纏っている私服も、丁寧に織られた高級品だけに僅かに切り裂かれた痕が目立つ。

病弱なまでに青白い肌が裂け目からちらちらと垣間見られるが、高度が高度なだけに地を這っている人間には雲を通してその姿を覗く事は叶わなかった。

腰までありそうなほど長くそれでいて艶やかな白髪も、本来ならば重力に従い垂れる筈だが、今は移動中の為地面と平行状態で優しく主人に寄り添っている。

天空を滑るように駆け巡る少女の姿は、翼の色も重なって、御伽噺に出てくる天使のようだった。

後れ馳せながらも後ろからは飛行魔法を駆使し追尾してくる者の怒声が高々と響いてくる。

四人の追跡者は、何れも頑丈で分厚い甲冑に身を包ませ、弓をその手中に握り、少量でも少し肌に触れたならば一分も立たずに絶命する呪術をあらかじめ施していた矢を数本ずつ入れた矢筒をその背に背負い、女性に迫っていく。機動力言えば魔法を駆使している追跡者に少し分があるが、女性は身軽な服装、対して追跡者は相当な重量を抱えて飛んでいるので五分五分といったところだろうか。追っている者と逃げている者。双方は双方とも互いの存在に恐怖し、一方はその存在を消そうと蛮勇を奮い立たせ、もう一方はその存在から自分という存在を奪われないように体を竦ませながらも皮肉なことに敵という存在が彼女の氣力を取り戻させ何とか逃げ延びている。

「ハア……ハア……ハア……」

断続的に翼を動かし続けるという行為は大地を全力疾走で駆け抜けるという行為と同等あるいはそれ以上の体力を要する。今は滑空だけで済ませてはいるがそれでも疲労の色は隠しきれない。

「逃げるてるだけの奴なんて怖くねえ！」

追跡者の一人が己の精神を安定させる為に口に出した言葉だった。自らを恐怖から護る為の行いであり自己暗示でもある。

しかしその言葉がこの嫌な雰囲気とおさらば出来る機だと考えた追跡者のリーダー的存在は

「そつだ！ 逃げてるって事は俺らより弱いつて事だ！ ならあんな奴に恐れることはねえ！ 何が帝国創立以来最高の魔法使いだ！

? 魔法すら使ってねえ奴が魔法使いなわけねえだろ!? きつと異種族がそんな風に伝わっただけじゃねえか!? ならそんなハツタリで名声を得ている奴程度戦いを本職に置いたベテラン傭兵の俺たちの敵じゃねええええええええ!」

「おおおおおおお！」

　　「一々噛み砕いて自分たちがいかに優勢であるかを語り、味方の恐怖を瞬く間に打ち消しそうとした。それに答えるように仲間たちからの雄叫びがあがった時、それは完全なる成功を意味し味方の士気が爆発的に上昇する。」

「……やっぱり……もう……」

背後から感じる威圧感が増したと自分自身の体力が最早限界に達した所で女は決心したように翼を折りたたみその身を空中に投げ出す。実体の無い雲を貫通して下へ下へと重力に従って急速に落下。頬を伝って零れ落ちた多数の汗が、空に舞い太陽に照らされて煌く。

「落ちたぞ！」

そう追跡者の一人が歓喜の表情で声を張り上げるが

「馬鹿野郎！ あいつが向かってるのは」

それを言い終わる前にもう他の全員は敵がどこに向かっているのかを完全に理解している。ならず者の集団だからこそ少し抜けた所があるが、それでも一応プロフェッショナルの傭兵。近隣一帯の土地勘は誰もが持っているものだ。それが例え厚い雲が下を覆い尽くしていたとしても大体の場所は分かるのだ。だから彼女の落ちた先は

「傾国の森に入らせる前に殺せえええ！」

「おおおおおお！」

傾国の森。それは悪夢のような存在だった。

元々は精霊の森という正式で由緒正しい名前があったのだが今その名であの森を呼ぶものはそうはいないだろう。

追跡者たちが所属している国ジャスカイド帝国と、この世界で唯一戦争禁止令を敷いているデスジニア共和国の国境線に位置するこの森は、超巨大規模といっても過言ではないほどの森だ。具体的に言えば世界全体の約三分の一の樹木を占めているという。帝国としてはこの森を整備し、一度デスジニアへと戦を仕掛けようと試みたのだが、無限に沸いてくる魔物に劣勢を強いられ、躍起になった先代帝王が無理矢理森を制圧しようと十万という大規模な遠征を行ったのだがそれでも屈強な魔物たちに追い返されたという。その際に歴戦の兵士が次々とその命を奪われた為に帝国は一時大混乱に陥つたとらしい。

その事件があつてからは国を傾かせることの出来る強大な森という経路で【傾国の森】という大層な名前が付けられたのだ。

当然その森に人が迷い込みでもしたら九割九分九厘命を落とすといわれているが

「相手は魔物の同類だ！　なんとしてでもここで仕留めるぞ！　遠慮無しに打ち込め！」

その掛け声で急降下しながら弓に矢をつがえる。先端の鉄のやじりが特有の光沢を放ち

「　　つてえええ！」

十分に引き絞られた弦がその手中から解き放たれその反動で鋭い音を立てながら多数の矢が敵めがけて飛んでいく。

「ちっ」

直線的に飛んだ矢は標的に狙いたがわず直撃する軌道で放たれたのだが、森に落ちて木に防がれたのが先か仕留めたのが先なのかは人間の視力では判断できない。

仕留めた可能性のほうが高いのだがそれでも万が一ということがある。世の中は完璧といわれることが皆無であり、故に甘くないのだがそれで仲間が死んでしまったら本末転倒。奴の魔法をまともに喰らえば気絶あるいは負傷するだろう。そうなったら魔物に食い殺されるのが落ち。

どうするか……どうするか……

「隊長、どうするんですかい？」

判断する時間すら与えられない。その上で隊長と呼ばれたものが行う決断は帝国を左右する決断でもあるのだ。もし奴が生き残っていれば同類を引き連れて帝国を滅ぼしに来るかもしれない

冗談でも笑えないような可能性に隊長は

「追う。少しぐらいなら大丈夫だろ。奴が死んでりやそれを確認して報告すればいいし死んでなくてもそこら一帯を調べつくせばいい所詮翼がなけりや何も出来ない奴だ、小娘の足程度じゃ俺らから逃げ切ることは不可能だろう。ってことで行くぞおおおお！」

「おおおおおお」

隊長に鼓舞された他の仲間達は自身の発動している魔法を解除し新たな魔法を練る

欲するは【風】

我が身を守護する風となりて衝撃を緩和せよ

省略された呪文を詠唱し終えるとそのまま地面に落下していき何の抵抗も見せずに地面に足から着地した。本来ならば骨が粉々に砕けてもおかしくないというのに風に加護を受けた追跡者達は全くの無傷。そしてそのまま何事も無かったかのように四方に分かれて敵の探索を開始する。

「さて……狩りの始まりだ」

隊長は口の端を吊り上げて猛禽類の如く笑った

「なんで……ハア……こんな……ハア……」

少女    ファリシア・ダンダルゲルグは太い木に腰を預け肩で息を



しながらも必死で疑問を虚空にぶつける。  
だがやはり答えてくれるものはそこにはいない。もとより孤独な自分が誰かに問うというのも少し可笑しな話かもしれないが。

「帝国が……裏切った……？」

ファリスは人間ではない種族でありながら帝国に属していた。きっかけが何だったのかは忘れた。  
主に後方支援部隊として絶大な力を戦場で遺憾なく発揮し、その功績が認められく天使>とまで呼ばれるようになった。自分と全く正反対に属する憧れの存在に……

「やっぱり……人間じゃないと……駄目？」

そして何かは知らないがジュシウシキなるものが行われて自分がその主役だと文書で送られてきたので行ってみれば、扉を開けた途端襲撃に合い何とか間一髪で逃げてきたというわけだ。  
確かに戦場では畏怖の目で見られていたが……それでもあの仕打ちは無いだろうとファリシアは落胆していた。

「それよりも逃げなくちゃ」

呼吸がある程度整ってきた所で四肢に力を込めて立ち上がり、周囲に警戒を張り巡らせる。

希望的にはこれで引いてくれると助かるのだが、十中八九追いかけてこの森に入ってきているだろう。

先程の矢がかすりもしなかったのは運良く樹木が庇ってくれたからだ。もう二度とそんな幸運は訪れまい。

「魔法が使えればなあ……」

ファリシアは結論から言つて今魔法が使えなかった。  
何故なら戦の時に魔力を酷使しすぎたからである。次再び使えることになるのは一週間先ぐらいだろう。

「逃げなくちゃ」

再度それを口にしてファリシアは力強く大地を踏みしめた。

一歩また一歩と少しずつだかそれでもしつかりと前へ進む為に足を動かす。駆け出さないのは足音で追跡者に居場所を教えることになりかねないからだった。

「あれ？」

歩いている最中に何かしらの違和感を感じる。何に感じているのかまでは分からないがそれでも何かか変だった。

その違和感に首を傾げながらも‘今はそんなことに構っていられる場合じゃない’と思いただひたすら歩く。

それからどれくらい歩き続けたらうか。疲労がピークに達したので適当な木陰を選んでそこに座り込んだ。

颯爽と森の中を吹き抜ける風が、熱くなつた体を冷やしてくれてとても気持ちが良い。

「っ！ あれは！」

異常なまでに高い視力と気配がこっちに向かってきている敵の存在を教えてくれ、体をびくりと震わせた。  
だが幸いにも未だこちらは敵に気づかれてはいない。ならやりよう

はいくらでもある。

気配を極限まで消して気づかれないうちに立ち上がった瞬間

「え？ きゃっ！？」

すんと尻から地面へと落ちた。多少の痛みはあったが、問題はそ  
ちではない。

「足が……」

今まで酷使してきた分、足が体の全体重を支えきれなくなってきた  
いるのだ。  
さっき一度緊張を解いたので最早立ち上がる術は無い。

「なら茂みに」

その後の言葉は紡げずにファリシアは絶句した。今更ながらさっき  
感じた違和感の正体に気づいたのだ。

そう。この森には本来あるべき筈の雑草が見事に刈り取られていた  
のだ。

確かにそれでも小さい雑草などは生えているが、とても身を隠せそ  
うな代物じゃない。

打つ手は全て塞がれ、キングはただチェックメイトを宣告された状  
態。

「見つかったやつた」

あわよくばこのまま見つからずに通り過ぎることを期待していたの  
だがそれも叶わず、後は狩られるのを待つだけになった。

ファリシアには武器も与えられていないのに対して、敵は武器と魔

法を十分に使用してくる。いや、例えファリシアが武器を持っていたとしてもこの状態だったらどの道狩られるだろう。

「魔法が使えればなあ」

今日は同じ台詞を何度も言ってしまう。それだけもう頭に余裕が無いんだろうなとファリシア半ば諦めた気持ちで思う。

敵は泥を跳ね上げながら驚くべき速さで地面を駆けて向かってくる。魔法でも使っているのだろうか。

その間、みるみるうちにファリシアと敵の距離は縮まっていき……  
そして

「はあああああ！」

雄叫びと共に敵の掲げていた武器は振り下ろされる。

次の瞬間……悲鳴と共に辺りが血で鮮紅に染まった。



## 第零話 襲撃される者（後書き）

初めまして、漆黒の光といいます。

小説を書くのは余り得意ではないのですが、面白く読んでくださると幸いです。

## 第一話 彷徨う者（前書き）

ここからが主人公（斎賀）視点となります

## 第一話 彷徨う者

平成二十一年春。

この年は齊藤さいとう齋賀さいがにとって人生最悪の年と化した。

実力的に言えば合格間違いなしと思われていた大学合格でまさかの不合格。

翌日には高校時代ずっと好きだった彼女に思い切って告白してみた  
ら呆気なく失敗。

そのダブルショックを癒す為に友達と一緒に山へと行ったら足を滑  
らせて転落。

二度あることは三度ある      まさにこの言葉が身に染みたのであつ  
た。

宝くじも一万円が当選したこともあつたし十分に運はあつたのだが  
…… 使い切ってしまったのかも知れない

しかしそんな俺でもほんの少しは運が残っていた。

落下中に体が浮き上がり視界が歪み手足がばらばらになるほどの痛  
みが齋賀を襲ったかと思えばどこか知らない場所で寝ていたのだであ  
る。

.....

「じじじじじ」

齋賀は一人呟いた。しかしその声は虚空に吸い込まれるように消え  
ていく。

誰か答えてくれないかな〜と考えて口に出してみたのだがどこかか



ら返事が返ってくる気配全くといっていいほど無い。  
まあそれもそのはずというか……。  
斎賀は悲しくなって周りを見回す。

「……」

そして無言。

周りには人らしきものは見当たらない、それどころか街のようなもののさえも視界に入らない。

前後左右を見渡しても見えるのは木か草か花だけ。上空は青々とした大空が広がってはいるがそんな物を見たところで何の足しにもならない

急展開に頭が付いていかず、怪奇現象にも興奮できない。いつもならば騒いで気を紛らわせるのに……

「……」

更に無言。

ずっしりとした質量がかかっている腕に視線を落とした。

何も無いはずの手中にはどんな奇跡が起こったか、チェーンソーが握られている。

それは錆が無いどころか刃こぼれも無く新品同様。

使い方なんてものは一度も使う機会が無かったので知らないが使う機会も無いと思うしまあいいだろ。

………

何で俺、こんな所にいるんだろ？ 何で俺、こんなもの持ってるんだろ？

疑念が次々と心中で渦巻いたが、それに答えてくれる者もないし、

自分で考えることも不可能。

余りの心細さに、俺は頭を抱えなくなる。

「……」

再度無言。

俺はチェーンソーを湿っている地面へと置き、いつの間にか背負っていたものを自分の目の前に出す

「……」

全く見たことの無いようなデザインの鞆だった。

そもそも日本語じゃなくて外国語で書いてある。英語でもないようなので解読するのはすぐに諦めた。

背負っていたということを免罪符にして中を覗いてみるとそこには食料と水分らしきものが入っていた。

斎賀は訝しげに鞆の中身を一つ一つ外に出していく。

「……は？」

どんどん出していくのだがきりが無い。この鞆にどうやったらそこまで入るのかというぐらい出てくるのにいまだ中身が尽きることは無い。

膨大な量も問題だったが一番不審に思った点が入っていた中身の種類だ。

これから先飲食には困らないほどある携帯食料と飲料水・チェーンソーと同じく新品同様のサバイバルナイフ・問題なく使用可能な懐中電灯と電池・取ってはプラスチックだけど先つちよの方は石でできた用途不明の何か・ドレッシングみたいな容器に入った何か・簡易式のテント・布団・サイズがピッタリな服等、本当に様々な物資

が山のように出てきて斎賀が真っ先に感じたことは

「サバイバルでもしろってか？」

そうボソツと呟いた。

鞆がどういう仕組みでこういう風になってるかなんて知ったこつちやない。現に漫画やアニメなどでは普通に存在してたから誰かが作ったかも知れないからだ。

正常に働いていない頭はやっぱ萎えていた……。

何で俺がこんな所にいるかも分からないがとりあえず生きているということ事態は確かだ。

斎賀は胸に手を当てる。すると心臓が一定のリズムで鼓動しているのがありありと分かった。

「確かにこれだけあれば何でも出来るが……」

そういつて物資の山を見る。それは十分すぎるほどの資源だった。

だけど物資があっても足りないものが一つだけある。『人』だ。

人は人がいなければ存在できず支えあうことも出来ない。当然斎賀もその中の一人で一人は虚しかった。

家族がいない。親友がいない。知り合いもない。人さえいない。何の状況説明もなしにこんな場所に放り込まれて何をするわけでもなくただ生きるという。

最初のうちは頭が混乱して状況が把握できなかったのだがたった一人で外国の地に立たされて味方はいないと思うと寂寥感が胸にこみ上げてくる。

勘違いかもしれないが自分は外国に飛ばされてここで果てるのだろう。

誰に知られず誰にも見取られること無くただ無残に死ぬのだろう。

巫山戯るな！<sup>ふざける</sup> 突然そこで憤怒の念がふつつと沸きあがってきた。

死ぬ？ 果てる？ ああ巫山戯るなよ！  
何で俺がそんなことを思わないといけない！？

「……巫山戯るな……」

広大な森林の中で斎賀は小声でゆつくりと呟く。  
深い余韻を残し、呟きが響く。

「こんなわけの分からん土地で死んでたまるか……」

死んだ魚のような目をしていた先に対して、徐々に瞳に決意が伴い  
そのハイライトが復活してきている。

「死んで……たまるか

っ！」

斎賀は吼えた。

こんな所で死にたくない……死なない！  
声高に身の内の決意を絶叫して体に喝を入れる。両の手は拳を握り  
その決意を忘れないことを誓った。  
急にでかい声を出した為に小鳥がばさばさと空へと羽ばたいて行っ  
たがそんなものは関係ない。

「……けほっ……かはっ……」

喉が枯れて慌てて500mm程度の水を飲み干しそれによってむせ  
たりしたのだが……。

……何馬鹿やらかしてるんだろ俺。  
その後テントを四苦八苦しながら建ててその中に布団を敷き、しっ  
かりと熟睡できたのは斎賀が大物だからなのかそれとも鈍感なだけ  
なのか……。

上機嫌に歌うような小鳥のさえずりが目覚まし代わりとなり斎賀は起動した。

ふあゝ……眠い……後30分位寝よかな。

「知らない天井だ」

朝開口一番に発したのはやはりお約束である。

ここで通じるかどうかは怪しい所だが……。

朝は低血圧な為に起きるのは苦手なのだが場所が場所だけにそんなことを言っている暇は無い。

とりあえず布団を適当に剥いでテントから抜け出し太陽の光を浴びて背伸びをした。

「ん」

声にならないほど気持ちの良い朝の背伸びは天然の森林の中だからこそ余計に気持ちよかった。

ついで深呼吸をすると樹木によって清められてひんやりした空気が肺に入りその味を初めて感じられる。

「一週間程度だったら悪くないかも……」

昨日あんなに凹んでいたのに凄い立ち上がりようはやはり流されやすい性格の為だろう。

なにはともあれポジティブシンキングである。ものは考えように変わるのだ。

「殺風景な場所だな」

木。木。木。木。

やはり木しかない。それが普通かもしれないが、やはり楽しめないのは嫌だ。

例えば狐とか狸とかがいればそれを鑑賞したりして暇を程よく潰せるのだが、そんなに簡単に見つかるものでもないし。

逆に熊が出てくれば必死こいて逃げ回らなくちゃならんし。下手すりゃ食われて死んじゃうし。

「どうしたもんかな」

人生とはやはりまま成らないものである。

「暇じゃないけど暇なんだよな」

せめて夢落ちであればという儚い希望もさつき無残に砕けたので、  
帰る方法をどうにかして探さなければならぬ。

しかしもしもここから適当に歩いて獰猛な野獣の領地<sup>テリトリー</sup>に入ってしまったらそれこそただの間抜けだ。

だからといって探さなければここで朽ち果てるしかない。

結局は安全策をとってここで暮らし続けるか、危険を冒してこの森を抜けるかの二択になるわけだ。

街まで行けば交番とかに行つて適当に手続きすれば帰れるもしくは保護されるわけだし。

「とりあえず動くか」

下手な考え休むに似たりである。

斎賀はテントを元の形へと戻しどうやって入ったのかは不明だったが、鞆へと収納した。

「さていつちよ行きますか！」

元気の良い掛け声に合わせるように体が軽く動かせる。  
斎賀の記念すべき？ 一日目の朝であつた。

一時間後

「たああああすうううけえええてええええ！」

斎賀は後ろから迫り来る獰猛な野獣と追いかけてっこをしていた。出会いはほんの些細なことで尻尾を踏んでしまうというベタなことをやってしまいまさに今その命を狙われているのだ。

後ろから物凄い足音を響かせ、ちょこまかと動き回る斎賀を追いかけているのは

『アオ                      ン！』

黒い毛並みをした狼だった。

斎賀と同じくらい大きな体躯で、牙やら爪やらが鋭い狼。すぐに捕まるかと思ったのだが、何故か狼と同等の速さで大地を駆け抜けながら必死に敵の攻撃おおかみをかわしている。

「謝るから追いかけるなあ                      ！」

などと狼に語りかけているが、それも虚しく失敗に終わる。

その後も当たって砕けるの精神で試行錯誤してみたが、全てあえなく失敗した。

なので出来ることは走る、足を動かす、大地を蹴るのどれかしかない。まあどれも似たようなものだが……

漆黒の長髪がぐしゃぐしゃになり、数本べつとりとした汗で顔にひつつく。

「俺なら空を飛べる！」



何を思ったのかは知らないが斎賀は急に立ち止まり瞳を瞑った様だ。  
そして

「

」

斎賀は呪文を唱えた。

しかしその呪文は完全に出鱈目<sup>でたらめ</sup>だった為発動しなかった。

狼の攻撃

「ぎゃ

」

斎賀の服を切り裂いた。斎賀の精神に100のダメージ、斎賀はパニックに陥った。

服に少し風穴が開いたことに対して斎賀の恐怖心はますます強くなり、テンパリながら狼に向かって怒鳴った

「死ぬ！ 絶対死ぬ！ 本当攻撃とかすんじゃねえよ！ 俺の命尊重しろよ！ 俺は逃げるからお前もう追ってくるなよ！？ いくぞ！？ 一・二・さ ぎゃ ！ 言い終える前に攻撃すんなって！ 卑怯だぞ！ ああすいませんもう攻撃はやめてください  
」

怒鳴りつけたり懇願したりしながらもちやっかりと足だけは動かし  
ている斎賀。微妙に器用である。

『アオ

ン！』

「ぎゃ

」

死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！ マジ死ぬって！ 俺死ぬって！

あの狼野郎そこんとこ分かってんのかこん畜生！

とにかくあんな大きな声聞いたら逃げるのが俺のポリシー。決してビビッてるんじゃないぞ。ビビリじゃないからな……

グルルルル

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

「死ぬうううう！」

唸り声に恐怖して一目散に逃げ出した俺。別に怖くなんか無いぞ。ただ早く寝ようかなって

ガウツ！

ハイスイマセンデシタ。H A H A H A俺にも素直な所があるのだよ。……悪いか!?

既に上着の半分が破れているという、普通の人が見たらキチガイに見えるかも知れない格好で斎賀は走り続けた。

数分後

「やってやったぜコンチクショーーーーー！」

斎賀は歡喜の雄叫びを上げた。

体から溢れ出た汗で髪やら衣服やらがべたべたにくっついていた。所々に軽く切り裂かれた所があり、薄い赤色に染まっている。

全力疾走で数分も走ったことで体力が限界に近く、荒い息をしながら

ら腕で汗を拭う。

「フハハハハハハ！」

達成感で気持ち悪い笑いが全く止まらない。

後ろから狼の姿は見えず、俺が狼相手に足で勝った事がたまらなく嬉しいのだ。

普通なら有り得ない経験だが……

「獣のクセに足が遅いんだよ！」

ここぞとばかりに必死に罵倒を始める。

本来ならば簡単に追いつかれて体を貪り食われていたというのにいい気なものである

「あゝ、疲れた」

その場で一気に崩れ落ちる。

幸いにも近くに樹木があったのでそれに腰を預けて脱力する。

達成感と共に緊張が緩み、今の今まで溜まっていた疲労が一気に開放される。

その疲れはどことなく気持ちよく、時折拭く爽やかな風が頑張った俺へご褒美に思えた。

久々に運動した為に太股と脹脛がぱんぱんになってしまったのが少し難点だったが……

「あふう」

鞆から取り出した飲料水を頭の上から落とすと、ひんやりとした水が汗ごと流れ落ちていきさっぱりしてこんな声が漏れた。

少々今の服装は破れたりしているので着替えたくなつたが、もうそんなことをする気力なんでもどこにも残っていない。

濡れていて気持ちいいし、もうちょっとこのままでいいか。

そんなことを思っていると、死の恐怖から開放された安堵感と程よい疲労感が重なったことで<sup>まぶた</sup>瞼が重くなってきた。

こんな状況で寝たら風邪引くぞ、と自分を叱咤したが睡魔を撃退することまでには至らず、結局俺の意識は吸い込まれる様に消えていった。

## 数時間後

うん、運が悪いつて事は崖から落ちたときから気づいてたよ。気づいてたんだけどさ……

「龍なんて聞いてねえぞおお！」

俺は再び逃走していた。

何故なら起きた途端双の目が俺を射抜いていたからである。

何がなんだか分からないまま恐怖心に駆られたことで再度全力疾走。前回と同じように走っていればまたやり過ごせていたならばどれほどいいだろう。

しかし……今回は追いかけている獣の種類が違った。

そう　　龍だった。

見事なまでに全身を漆黒に染めていた黒龍。

しかし俺を捉えるその瞳は魅入られるほどに紅く澄んでいる。

体長は大体3メートルぐらいだろうか。想像していたよりも猛々し

く感じられるのは纏っている雰囲気オーラのせいだろう。

四本足でしっかりと立っているその姿は生物の頂点にも感じられる。一瞬足が竦んで動けなくなりそうだった斎賀は現実逃避して戦略的撤退を繰り返していた。

要するにここは夢だと自分に言い聞かせているのだ。

それでも鼓膜が破けそうなほど大きい咆哮が繰り返されると斎賀も絶叫を上げて対抗するのだが、結局は震え上がって必ずといっていいほどこけそうになる……

「グオオオオオ

！」

「ぎゃ

！」

なんで龍がこんな所にいるんだ！？ 龍は幻想ファンタジーの中の生き物であって現実リアルにはいないはずだろうが！ と叫びたくなったが、本当にそれどころではないのでやめておいた。

先ほどとは比べ物にもならないほどの危険を感知している頭が、的確に一つの命令を与えてくれた。

逃げる！

逃げる！

逃げる！

逃げる！ 俺！

それは動物ならではの危険信号ほぐのうであった。

逃げていても対格差が対格差なので直ぐに追いつかれてしまうが小柄ならではの小回りを活かし方向転換を繰り返している。

龍には会ってみたかった斎賀だったがやはり命を狙われるのは御免だ。

炎を吐いたり敵を倒したりして格好いいと思うのは幻想の中だけであって、現実では本当に迷惑極まりない行為としか言いようが無い。しかもその敵さいがにとっては尚更だ。



そして

「もう……駄目……」

心身ともに限界に達した斎賀の視界は黒で塗りつぶされていくのであった。

## 第一話 彷徨う者（後書き）

ファリシアと邂逅するのは次の次ぐらいを予定しています。



## 第二話 初邂逅

「ふあゝあ　　つくしゅん」

欠伸を一つしていたら、それに混じってくしゃみをしてしまった。  
慌てて鼻を<sup>すす</sup>吸り、今体に纏っているずぶ濡れの服をだるそうな半眼で確認する。

「ん？　なんで俺こんなところで、こんな服着てんだ？」

その問いには覚醒してきた頭が記憶を引っ張り出してきてくれて答えられる。

「確か狼に追っかけられて……その後……」

龍に……という言葉が出る前に、斎賀は喋るのを止めていた。

記憶が鮮明になるにつれて、あのときの恐怖が再び襲ってきたのだ。  
あの牙が、あの爪が、あの顎が、体をもし貫いていたらと想像すると、おぞましいことこの上ない。

一つ間違えば普通に殺されていたという、最大の恐怖。まさしく九死に一生を得たという事実。

「……………くそっ」

服を一瞬で切り裂かれた場面や、後一步で龍の牙に捕らえられていたという場面。

色々な場面が織り交ぜられて悪戯に斎賀の恐怖心を煽<sup>あお</sup>ってくる。

それに寒さも加わって、体が小刻みながらもがくがくと震えだす。  
それを抑えようと必死になって両手で肩を抱くが、一向に止まる気

配を見せてはくれなかった。

時間がたつにつれて恐怖心は募り、それは感じたことの無い怯えへと変換されていく。

こんなみつともない姿をしたのは何年ぶりだろうか。多分餓鬼の頃以来だろう。

「……くそがつ」

弱弱しく誰でもない自分を罵る。

だがそれでも震えることは、怯える事は、心から消えることは無い。常に敵が背後にいるような感じがして、それからいつ命を奪われるかもしれないという焦燥に駆られてせわしなく頭が動く。

「大丈夫だ。敵はいない。大丈夫だ。敵はいない。大丈夫だ。敵はいない。大丈夫だ。敵はいない。大丈夫だ。敵はいない。大丈夫だ。敵はいない。」

繰り返し同じ事を呟くことによってその言葉が支えになってくれるような錯覚が起こった。

「つくしゅん」

体の竦みが取れていくと二度目のくしゃみが出た。

風邪を引いてしまったかなと思い、いそいそと鞆に詰め込まれていた服に着替え始める。

月明かりに照らされながら、真新しい灰色の服が体に温かみを取り戻してくれる。

「それでここは一体どこだろ？ 龍いたし絶対日本じゃないよな……。いやいや、多分俺の知ってる外国でもないし……。下手すりゃ地球ですら無いし。RPGの世界に入り込んだんじゃった」とかいう事は

ない……はず。だってRPGって言えば先ずは雑魚敵から順番に倒していつて、レベルが上がったら最後にボス戦が基本だろ。それを初回からボス級のドラゴン相手とかはつきりいつて不可能に近いし。そんな高難易度のRPG作っている会社なんて絶対無いからな。つてことは……まさか異世界!？」

消去法で想定しうる結果が一つに絞られた所で、斎賀はテントを組み立て始めた。

組み立てるといつても少し手を加えれば簡単に出来る式の物だが……。

「でもなあ……異世界に行った小説見てきたけどろくなものがなかったんだよな」

そう。当たり前のことだが小説に出てくる主人公は絶対に平穩な生活を送ることは許されない。

ここは小説の中じゃないのだから別にそんなことを思う必要は全く無い。無いのだけれど……。

「絶対巻き込まれそうだ……」

明日からどたばた騒ぎが起るかもしれないという可能性を否定しきれない斎賀は一人肩を落とした。

基本的に面白いことは続くがそれ以外は飽きっぽい性格なので、これからおこるであろう出来事に危惧しているのだ。

勿論、一度は来てみたいと思っていたこの世界に来て心を躍らせてはいるのだが……。

「素直に喜べないのは、命の危機に瀕したからか？」

一人のときに疑問をすぐに口に出してしまうのは、小さいときからの癖になってしまっている。

これといって迷惑をかけていないので気にしてはいないが。

「ま、カメラ持ってきてなかったのが悔しいけどいつか。これから龍とか架空の存在だったモンスターがどんどん出てくるからなあ。」  
う　　っ、楽しみだ！」

さっきの恐怖なんてもう忘れた。

実を言うと少しは怖いけど、そんな物関係ねえ。

俺は、今から、誰も目に出来なかった世界を堪能するんだ！

布団の中に入るとそんな風に思えてきて、急に溢れ出てきた興奮が眠気を吹き飛ばす。

今すぐにでも動き回りたかったが好奇心を抑えてやめておいた。

斉藤斎賀、十八歳。馬鹿な高校生であった。

翌朝、寝惚けながら散歩していた俺に、ある出来事が襲った。

その出来事は、唐突に、それでも確かに起こった。

ただ普通に暮らしていただけなのに。そんな願いを簡単に踏みこじる出来事だった。

平穩を、強制的に強奪されるという悪夢。

これから物事が俺を中心に動いていくという恐怖。

それが起こった瞬間、俺は寒気すら感じた。

自然と靴が擦れながら後ろへと向かっていき、息を必死に押し殺していつでも逃げれる準備を整える。

それほどまでに危険がそこには溢れていた。

何故なら……何故ならっ！

「……………」

今、俺の視線の先には、なんと、同じ年位の少女が、佇<sup>たたず</sup>んでいたからだっ……！

不味い。非常に不味いことになった。

美少女邂逅 知り合ったことで巻き込まれる。

この方程式はもう既に予測済みなのだよ。

だけど……………このまま去るのもなあ……。

横目でちらつと少女を盗み見る。

ちゃんと視線が重なっているはずなのにどこか遠くを見ているような紅く艶やかな瞳。

その瞳の色と同じくして、煌きを放っているさらさらな真紅の絹髪。この際だからはっきり言おう、うん、滅茶苦茶可愛い。

外人……もとい異国の地の人だからなのだろうか。露出度がかなり高い。服なんて臍<sup>へそ</sup>が見えるくらいだ。

スカートはミニスカートっぽいやつで、黒のニーハイソックスを履いている……しかし、変な感じが少しだけしてしまう。

「あゝ、一人？」

とりあえずなんか話をしなければと思い、恐る恐る、といった感じで声を掛けてみると

「……………ん」

僅かな間を空けて、少女はコクリと首を一つ振って肯定された。どうやら異国の地とはいえ言語は通じるようにしてくれているらしい。流石といえば流石だな、神様。

「迷った？」

「……………違う」

今度はかなりの間を空けて否定された。

瞳を見れば嘘か誠かが判断できるだなんて事を聞いたことがあるけど、少女の視界には斎賀を除けているような感じがする。というより興味の対象にすらなっていないんじゃないか？

「こんな所にいたら危険だぞ？ なんなら俺と一緒に出口探すか？  
一人よりも二人のほうが危険も減るだろうし」

まあ危険分子の可能性が高いが、こんなか弱い少女を独りにするほど俺も薄情じゃない。

「……………危険じゃない」

だがその提案と危惧は首を振りながら否定された。

「……………皆……………いる」

「皆？」

オウム返しに聞いてみると、少女は首肯した。

寡黙な性格らしく、少し言葉を話すか、首を縦に振るか横に振るか

だけで会話を成立させている。

「親御さん？」

そう尋ねると、次は首を横に振った。そっぴや一人って言うてたな。

「誰？」

「……………エアリス達」

「エアリスって？」

「……………仲間」

傍から見れば会話になっているのかいないのか。意思を通じ合わせられないことは無いので、もう少し突っ込んでみる。

「エアリスって、人の名前？」

その問いに少女は再度首を振ることによって答えた。人じゃなければ大方犬か猫だろう。大まかに予測しながら話を本題に戻していく。

「君はここで何をしてたんだ？」

「……………？」

意味が分からないとばかりに首を傾げられる。

「見たところきこりとかには見えないし……………斧も持って無さそうだしね。迷ってもいないって言うてたし、何をしてたのになって、ちよつと気になってさ」

「……………君じゃない」

一頻りの時間を置いた後、少女はボソリと呟いた。

「レイ」

それが名前の事を言っていると理解できるには少々時間を要した。手短で簡潔な……悪く言えば無愛想な自己紹介だ。

しかしレイか……漢字で書くと『零』かな？ それとも『怜』か？ それとも片仮名の『レイ』か？ まあレイでいいや。

「俺は斎賀。 斉藤斎賀っていうんだ。 よろしくな」

微笑を浮かべて右手をレイに差し出す。

「……………？」

斎賀が手を差し出した意図を掴めないのか、レイは不思議そうな顔をしてこちらを見てくる。

いや、やはり俺の先を、と言ったほうがいいだろ。少し虚しい。それにしてもこの顔ってことはここで握手は浸透していないんだろうか。 まあ俺の常識がこの常識じゃないわけだし、別にそこまで驚くことじゃないか。

慌てて手を引っ込めると、再びレイに尋ねた。

「レイはここで何をしていたんだ？」

「……散歩」

「散歩って……ここ森の中だぞ？ 色々獰猛な野獣も襲ってくるし……この森に龍がいるって知ってる？」

返事は首を縦に振ることで済まされた。 どうやら知っているらしい。



「あなたもここに住んでるの？」

「へ？」

「あなたもこの森に住んでるの？」

真剣に答えてもらいたいと瞳が語っているような感じがした。

そう判断した理由はレイの瞳がきっちりとして、‘斉藤斎賀’自身を捉えていたからだ。

.....

だがどんなに考えてもなんて答えればいいのか分からない。

ここに来て三日目ということには一応なるのだが、そんなことで住んでいるということになるのだろうか。

うーん、異世界から飛ばされてきたなんていったら‘変な人’のレッテル貼られるの間違いないだろうし.....。

ならとりあえずここは無難に、

「この森入ったら、いつのまにか迷ってたんだよ。全く、困ったもんだよね」

「.....?」

首を傾げるレイ。なんだ、そんなにおかしなことか？

「.....家.....来る？」

「家って.....この森の中にあるのか？」

「.....ん」

次は首を縦に振る。まるで子供みたいだな。

「俺男だけと一緒に行っていいのか？ もう一度言うが俺男だぞ？」  
「.....?」

「一つ屋根の下で若い男女が二人きりなんてのは色々不味いことがあるんじゃないのか？ まあ俺はそんなことはしないけどさ」

「……問題ない」

今の会話から分かった結果。

どうやらこの世界は日本みたいに男女の恥じらいというかなんというか、そういうものが無いらしい。

異世界だからということでは常識には目を瞑っていたのだが、やはりというべきか、異世界は凄かった。

日本で育ってきた俺は、男として見られていないようで少し落ち込んだのだが。

「じゃあ、お願いするよ」

ここに何時までも居たいというわけではないが、我武者羅に一人出口を探しても見つかる可能性は低いので、一応といった感じた。それにここで初めて会った人間。何かしらの縁がこれから先ずっと続かならば、もうどうにでもなれという気持ちで承諾した。

「……………」

しかしレイからの返答は無く、あろうことかそのまま踵を返して歩き出してしまった。

これは一体どういうことなんだろうか？ ………………異世界人の気持ちなんて知るか！？ 考えても分からないんだし本人に聞いてみるか。

というわけで、早速俺はレイを呼ぶことにした。

「レイ」

「……………」

返事は無い。

「レイ」

「……………」

一応離しかけられるぐらいの距離を取ったままついて行ってるのだが、相変わらずレイからの返答は来ない。

「レイ〜」

「……………」

声は……届いているはずだ。

なのに振り向いてくれないって事は無視されてるって解釈してもいいんだろうか？

荒れ放題の森の中で斎賀が枝やら土やらに足を取られていつているのに対し、レイはそれが当然とばかりにすいすいと進んでいく。

あちこちに虫が飛び交い、ついでに俺に突進してくる。うざいことこの上ない。

「レイ」

斎賀は思わずレイの肩を掴んでいた。

周りに気を配りながらレイのスピードに合わせるのが難しくなってきたからだ。

「……………？」

何事？ とばかりにレイは半身だけ振り返る。しかしやはりその瞳の焦点は斎賀を捉えてはいない。

「俺もついてきて良かったのか？」

「……？」

意味が通じていないのだろうか？ いや、そんなはずは無い。一応単語だけならレイにも通じるし。

「俺はレイについてきても良かったのか？」

真剣にそう尋ねると、レイはいつものように首を傾げる。

「？ ……さっきから、そう言ってる」

「あ、そうか。そうだったな、悪い」

さも当然のように言い放ったレイが正しい気がしてくる。まあここでは正しいのかもな。一瞬見捨てられたかと思ったけど……。しかしその後もうこれで話は終わりだと言わんばかりにレイは前を向き、再び歩き出した。それに続いて俺も……ってこれじゃさっきと一緒じゃん！

「レイ、歩くのにコツとかあるのか？ どんなに頑張ってもレイにあわせられないんだけど」

「？ ……足を、動かす」

「そうじゃなくて。どういう風にしたらこの森の中をすいすいと歩けるのかなって」

「……普通に歩く」

駄目だこりゃ。そう思いながらもレイの後を必死に追いかけていく。ゆっくりと自分のペースで歩いていたときは格段に難易度が高レベルなものになっていた。

時にいきなり現れる枝が顔に直撃し、時に足元がお留守になつてずつこけ、時に窮屈な木々の間を抜けているときに体の骨が悲鳴を上げる。それに対しやはりというべきか、レイは涼しげにひよいひよいと障害物を苦も無く避けていつていた。真似してみようかと思つたら逆に歩きづらくなつたので、自然体に戻す。

「……………」

「……………」

レイは基本的に必要のあること以外は口を閉ざしている性格のようだ。これがこの世界の常識なのか、はたまたレイだけの個性なのかは未だ分らない。

寡黙っていうのもそれはそれでいいと思うが、流石に二人きりでの沈黙には若干辛い。

それでも、レイの顔を見てみたらほんの少しだけど、嬉しそうに見えたのでそのままでもいいかという結論になった。勘違いの可能性も否定は出来ないが……。

「……………」

不意にレイが振り返ってきたので慌てて立ち止まる。

「どうしたんだ？」

「……………」  
「あれ」

レイが指差した方向をつられてみると、そこには

「エアリス」

昨日斎賀を追いかけていた黒龍が、とても気持ち良さそうに眠って

いた。眠っていると判断していたのは紅い瞳が見えないからであり、気持ち良さそうと思ったのはなんとなくそんな雰囲気を出していたからである。

普通ならば絶叫して逃走していた斎賀だったが、あまりにも隣に立っているレイが普通の表情をしていたので今のところは腹の底から湧き上がるような恐怖を感じることは無い。

「エアリス？」

「エアリス」

もしかしたら間違いかもと聞きなおしてみたのだが、やはり指差している方向には黒龍がいる。

「まあいつか、別にここは地球じゃないんだし。地球の常識持ち込んだらそれはそれでおかしいことになるし。これくらいで驚いてたらまだまだとかいう展開が次から次に起こりそうだし」

レイに聞かれないような小さな声で呟いた。頭が柔軟、もしくはただ現実逃避しているだけだったが、取り乱さなかったのは幸いだろう。

「……挨拶……する？」

「遠慮しとく」

気持ちのいいほどの即答。

レイはどうだか知らないが、命を賭けてまでする挨拶なんてお断りである。

「……………」

じつと、何かを期待しているような目でこっちを見つめているレイがいるのは気のせいかな？

「……………」

……気のせい気のせい。知らん振り知らん振り。

「……………」

……そんな目をしたからって挨拶なんかしないぞ！ 断固として拒否する！

「……………」

……うう、そんな反則的な上目遣いはやめてくれ。

「……………」

「分かった！ 分かったから！ ちゃんと挨拶するから！ するからそんな目で俺を見ないで！ 本当にお願いだから！ そんな潤んだ瞳で俺を見ないでくれ ！」

こうなってしまったのは仕方が無いと思う。涙目＋上目遣いに逆らえる男は稀なのだから。

ま、触れるだけなら問題ないだろ。

腹をくくった斎賀は、一步、また一步と着実に黒龍に近づいていく。そしてあと少しで触れられる、といった所でいきなり

『ガア

ッ』

「ぎゃ

っ！」

黒龍が欠伸をするように口を大きく開けたのに怖気づき、斎賀は腰を抜かす。

立ち上がるかと必死に試行錯誤してみるが、立てない。

「うつ……あつ！」

いくら異世界は異世界だと割り切れても怖いものは怖い。

結局、斎賀は黒龍に脅されながら必死に気を失わないようにするのが精一杯だった。

「……………？」

必死になっている斎賀を、後ろで不可解そうにして眺めているのが約一名。

結局、数分後にレイが手を貸してくれるまで、斎賀は座り込んでいたのだった。



## 第二話 初邂逅（後書き）

…前言撤回。指摘を受けた通り中々話が進まないのでファリシア邂逅までは時間が掛かりそうですorz

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9124f/>

---

異界から召還された真水の騎士

2010年10月13日18時29分発行